令和３年度　北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】
１　報　告　地　区：胆振地区
２　事例報告学校名：室蘭市立天神小学校
３　報告者職・氏名：校長　林　　暁　宏
４　キ　ー　ワ　ー　ド：立地条件を生かした地域との連携

全ての子どもたちに質の高い教育を提供し続け、健やかな成長を約束するのが公立小学校の使命である。しかし全教職員が一丸となって学校を前へ進めていくにあたっては、常に多くの課題が目の前に立ちはだかるというのが校長として数校を経験して感じることである。

現在は、少しでもベクトルを合わせ、やりがいをもって教職の道を進んでいけるように、そして少しでも子どもたち自身が自分の成長を実感できるように、中学校や保護者・地域の皆様、室蘭工業大学や室蘭聾学校と連携した教育活動の推進に意を注いでいるところである。

１　はじめに

本校は、室蘭市の学校適正配置計画に伴い、水元小学校と高砂小学校の２校を統合して新設され、今年度が開校２年目の学校である。開校直後にコロナ禍における長期の休業を余儀なくされた上に、２年目でありながら今年度校長が新しく替わったということもあり、組織運営にあたってはいろいろと難しい面がある。ただ、前任の校長が強力なリーダーシップでしっかりとした基盤をつくっていってくれたことから、私の使命は、そこから見える課題を整理し今後に向けて学校自体に加速感をもたらすことと考えている。

全校児童は422名。域内には室蘭工業大学や室蘭聾学校があることに加え、地域との結び付きも強く、学校運営協議会の準備も着々と進んでいる。また、ほぼ全員の児童が東明中学校へ進学することから小中の連携もスムーズに行われている。

２　立地条件を生かした教育活動

(1)　ＳＴＥＡＭ教育を視野に入れた室蘭工業大学との連携

校長室の窓からは、本校のグラウンドを挟んで室蘭工業大学の実験棟が見える。

歩いて数分のところに先端技術を研究し、ものづくり室蘭の牽引役も担っている施設があるのは、ＳＴＥＡＭ教育の視点からも立地条件としてはかなり有利な状況である。

右の写真は、第６学年児童が室蘭工業大学の教授と学生にプログラミングの基礎を教えていただいたときの様子である。大学施設内の機器等に触れることは今は叶わないが、本職の先生方や学生たちに直接教えていただけることは子どもたちにとって大変な刺激になっていた。

子どもたちは、自分がつくったプログラムが実際に光や音となって現れる体験を通して目を輝かせ、興味をもって意欲的に課題に向かい、新しい世界を見付けていた。

科学・工学技術の基礎の基礎に触れ、「知る」ということと「つくる」ということの分野横断的な学びを体験することができた。

(2)　「みんなちがってみんないい」室蘭聾学校との交流

歩いて15分のところには室蘭聾学校がある。

本校では、第３学年の総合的な学習の時間の充実を目指し、ノーマライゼーションの基礎を学ぶため室蘭聾学校との交流を実施している。

第一段階として、室蘭市内にある「手話の会」の方をお招きして手話に触れる機会をもった。実際に聞こえに不自由がある方との手話を通した交流により、子どもたちの心に大きな変化が起きるとともに、本学習への興味関心を大いに高めることができた。（写真下左）

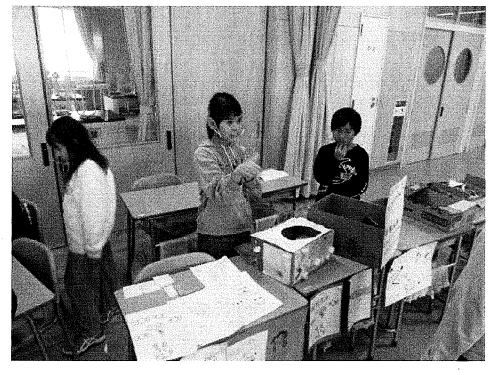
第二段階では、実際に聾学校を訪ね、聞こえに不自由がある友達がどんなふうに勉強しているのかを参観させてもらった上に、危険や非常事態を音だけでなく光でも知らせるような仕組みがあちこちに設置されているなど聾学校ならではの様々な工夫点について学んだ。（写真上右）

以下は、その時の子どもたちの感想である。

○天神小学校とは違うところがたくさんありました。耳の検査をする部屋が心に残りました。
○耳が聞こえない子どものためにいろいろな工夫をしているんだなと思いました。
○ろう学校はちがうところいっぱいあって、聞こえ方がちがう補聴器をつけてみんな頑張っているんだと思いました。

第三段階として、聾学校の児童を本校に招いて、「手話の会」の方から教えてもらった手話をつかって歌を発表したり会話にチャレンジしたりという活動に取り組んだ。

本校の子どもたちにとっては、自分のこれまでの学びを駆使して大切な仲間づくりができる喜びを、聾学校の子どもたちにとっては、同じ域内で学ぶ友達と交わす手話や表情でのコミュニケーションにより大人数で楽しむ体験を味わうことができるという、まさにWIN-WINの取組であるといえよう。



3　今後の課題

新型コロナウイルス感染症がもととなっている様々な制限下では、このような学校外の教育素材や施設の活用に最も大きな影響が出ている。しかし、立地条件という大きなアドバンテージを生かし、「制限下における最善」を合い言葉にこれからも可能性を広げていかなければならない。

また、教育課程への位置付け、教育活動自体の質を高めていくための価値観の共有とそれぞれの役割分担等々、大きな枠組みの中で様々な戦略が必要であることを感じる。

加えて開校２年目という、何かと足元の固まっていない中での実践の蓄積という点で、しっかりとＰＤＣＡサイクルに則った取組を進め、子どもたちの学びの質を上げていかなければならないと考える。